



Title	日本人英語学習者の談話における照応表現習得過程 : 横断的研究に基づいて
Author(s)	谷村, 緑
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58777
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	谷 村 緑
本籍 (国籍)	
学位の種類	博士 (言語文化学)
学位記番号	甲 第 44 号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	日本人英語学習者の談話における照応表現習得過程 —横断的研究に基づいて—
論文審査委員	主 査 教 授 舟 阪 晃 副 査 教 授 杉 本 孝 司 副 査 教 授 兼 田 英 二 副 査 助 教 授 上 田 功 副 査 助 教 授 真 嶋 潤 子

論文の内容要旨

本研究は、日本人英語学習者の談話における照応表現の習得過程を中間言語の観点から明らかにするものである。従来の中間言語研究では、語彙や文レベルでの調査が主になされてきたが、文を超える談話レベルにも中間言語が存在すると予想される。本研究では、談話に見られる様々な現象の中から照応表現に焦点を当てて、談話レベルの中間言語の存在を実証的に確認する。次に、学習者と英語母語話者から得たデータの比較を通して、照応の理解と産出（作文と発話を含む）についての説明を行う。学習者は、二つの文の局所的な関係についてはマスターできていても、一貫性を欠いた作文や発話を産出することが指摘されていることを踏まえ、照応に関する言語知識の形態的・文法的側面（例えば語形変化）と照応表現によって実現される談話のまとまり、すなわち一貫性に焦点を当てる。この調査により、文法的には理解可能でありながら不自然さを感じさせる学習者独特の言語表現の説明を試みる。

具体的には、以下の三点を目的とした調査・研究を行なう。

・理解の観点から：

1. 結束性の概念を援用し、学習者と英語母語話者を対象に、照応表現の理解の仕方に差があるのか、又、その差は習熟度で異なるのかを調査する。

・産出の観点から：

2. 産物 (product) における分析として、結束性の概念を援用し、学習者と英語母語話者の産出した談話の形態的・文法的側面に焦点を置き、照応表現がどのように使用されているか、又、使用域の違いが照応表現の使用に影響するかを調べる。そして、学習者と英語母語話者では使用に差はあるのか、その差は習熟度で異なるのかを検討する。

3. 処理過程 (process) における分析として、中心化理論を援用し、照応表現はどのように選択されるか、一貫性はどのように構築されるかを明らかにする。そして、学習者と英語母語話者では使用に差はあるのか、その差は習熟度で異なるのかを検討する。

第一章では、談話と照応の定義、用法の分類を行なう。そして、談話構造解明のためのトップダウン的な研究手法とボトムアップ的な研究手法について概観する。トップダウン的な研究には、物語文法を用い、心的表象から談話構造を明らかにしようとする研究が挙げられる。例えば、Thorndyke (1977) は物語の階層性を定式化しようとした。しかし、この談話の階層の実在性は経験的には妥当であるが実証できず、構造を規定する客観的基準とはなりえない。そして客観的基準なしには、談話構造を規定することはできない。

この高次の(仮説的)知識に対し、ボトムアップ的に談話構造を解明しようとする試みがあり、その手がかりとなる言語手段として照応表現が取り上げられている。照応表現は文脈なしに使用できず、逆に、照応表現を見ていけば、語用論的に談話構造の定義が可能であることを述べる。

第二章では、中間言語研究と、第二言語習得研究における照応表現の研究を取り上げる。ここでは、学習者の言語を、母語話者の使い方ではない学習過程の言語モデル(すなわち中間言語)として捉えるという観点を説明する。従来の研究では、母語を第二言語に置き換えることを習得と捉えていた。一方、習得過程の実態を見てみると、学習者は入手可能な言語情報に基づいて目標言語の言語システムに関する仮説を立て、それを修正したり棄却したりして第二言語の言語システムを徐々に構築し、これを繰り返して第二言語習得が進められるということが分かってきた。この過程における学習者の言語を中間言語と呼び、母語とも目標言語とも異なる独自の体系を持つものとして扱うようになってきている。本研究もその観点に立って、第二言語の照応表現習得に関する先行研究について理解と産出に分類し、まとめ、問題点を挙げる。

第三章では、本研究の枠組みを示し、又、本研究が取り上げる調査項目を挙げる。理解の調査では、先行研究で用法を分類せずにひとまとめに考察し、又、文脈が一義的に決められている文をテストに使用していたことを踏まえ、用法別の理解度調査と表現のゆれを生じさせる要因の検討を行なう。産物の調査方法には、Halliday and Hasan (1976) の結束性の概念を基本的には援用するが、外界照応を含めるなど調査項目を拡大する。処理過程の調査方法には、中心化理論を援用する。中心化理論は作例を扱っており、本研究で扱う自然な作文や発話を扱うには不十分な面がある。そこで本研究のデータに適応するように照応解析に並列構造を取り入れ、中心化理論に修正を加える。又、中心化理論は計算言語学の枠組みで発展を遂げているため、コンピュータが負う限界を引き継いでいるが、本研究は手作業で行なうため、ゼロ照応や間接照応などを分析の対象として取り込むことが可能となる。

第四章では、理解の観点から第二言語における照応表現の習得に関する実証研究を行なう。具体的には、指示(冠詞と指示詞)と代用・省略を取り上げる。

冠詞の調査結果より、不定冠詞と定冠詞では、定冠詞の方が習得が早いことが示された。又、タイプ別の分析より、直接照応と間接照応で学習者グループ間に有意差が認められ、習熟度が増すと習得の程度が高まることが分かった。しかし、観念照応では、有意差が認められなかったことから、上級になっても習得が十分に進まないことが分かった。観念照応は、テキストの文脈上に照応詞が存在する文脈照応と異なり、百科事典的知識を用いて照応する指示対象を推論することが求められるため、習得が難しいと考えられる。

指示詞では、特に *this* と *that* を取り上げたが、調査結果より、空間的距離では有意差は認められず、学習の早い段階である程度習得されることが分かった。空間的距離は、場面との対応があるため、指示表現の中では早く習得されることが幼児の言語獲得の調査結果でも報告されており、本研究の結果はそれに合致する。一方、心的距離と時間的距離では、有意差が認められたことから、習熟度が増すと習得の程度が高まることが分かった。

ゆれに関しては、英語母語話者は後続する文脈も考慮した上で冠詞選択 (*a/the*) を行なっていたが、初級では可算・不可算の区別自体に困難が見られ、又、上級では照応するものが文中に明示されてなければ *a* を選択するという傾向が見られた。この結果は、初級では十分習得されていない基本的な *a, the* の用法に上級が熟達したことを示すが、と同時に英語母語話者のような文脈解釈には到達していないことも示している。

代用・省略に関して、類似した表現を対応させ、熟達度別の理解度について分析を行なった。その結果、個々の用法を見ていくと、熟達度が増すとともに習得の程度が高まるものと、上級レベルでも習得が困難なものが見られた。

第五章では、産物と処理過程の観点から照応表現習得の実証研究を行なう。作文と発話データから、照応表現の使用頻度、使用域ごとの分布、談話構造の出現位置に関して、熟達度別にレベル分けされている学習者群と英語母語話者を比較する。又、照応表現を誤用、正用、不適切な使用に分類し、正答率の多少より、習得の程度を明らかにする。

産物における調査の結果より、学習者と英語母語話者はともに、使用域や媒体（作文・発話）により、照応表現の使い分けを行なっていることが示された。例えば、代用と省略に関しては、学習者、英語母語話者ともに全体の照応表現の出現数と比較して出現数自体が少なかったが、発話よりも作文により出現していた。学習者と英語母語話者の使用を比較すると、代用と省略は、初級ではほとんど出現していないことから中間言語の特徴の一つである使用の回避が認められた。冠詞と指示詞に関しても、学習者の指示詞の出現頻度は非常に低く、「指示詞＋名詞」は、中・上級にならないと出現は見られなかった。又、英語母語話者は、談話の開始や終了の合図に指示詞を出現させていたが、学習者にそのような使用は見られなかった。

正答率に関しては、媒体の違いよりも使用域の違いが正答率に与える影響が大きいことが示された。課題による学習者の産出の変異性は、学習者が中間言語の発達段階にいることを示している。又、形式も正答率に影響を与えていた。例えば、「指示詞＋名詞」や「固有名詞＋名詞」の形式をと

る場合は、単独で使用する場合と比べて、正答率が低いことが示された。

学習者に見られた誤用の推移に関しては、形態素レベルにおける誤用は比較的早く減少すること、その結果、相対的に、文法・談話レベルの誤用の割合が増加することが挙げられる。又、使用域が正答率に影響し、それは、発話、作文の媒体の違いよりも与える影響が強いことが示された。更に、上級でも多義的な照応表現の使用が残ることから、受容者に負担をかけることなく適切に照応することの難しさが示された。

産物の分析では、産出者がどのような照応表現を使用して、談話を構成しているかは分かったが、受容者の存在が考慮されていないオフラインの分析方法であるため、一貫性の高い談話が照応表現によって作り出されているかどうかは分からなかった。そこで、オンラインの処理過程に焦点を置き、照応表現はどのように選択されるか、一貫性はどのように構築されるかに関して、熟達度別にレベル分けされている学習者群と英語母語話者を比較した。分析手法には、本研究のデータに適用するように中心化理論に修正を加えたものを使用した。

その結果、学習者、英語母語話者ともに使用域によって一貫性の構築の仕方が異なること、又、使用域によって照応表現の選択が異なることが示された。更に、学習者と英語母語話者間に質的な違いが見られた。詳細を見てみると、初級では、照応関係を作り出す名詞の多用が認められた。つまり、焦点化されているにもかかわらず、名詞が繰り返されていることから、談話レベルの照応表現の使用としては不適切であることが示された。中級は中心〔焦点〕の移動は可能であるが、その頻度が高く、途切れがちな談話展開であることが示された。上級は、新しい中心についての談話が展開する部分では名詞を使用し、中心が継続するときには代名詞を使用することができ、談話構造を支える要素に対する理解をうかがわせる。しかし、上級は英語母語話者と比較して、更に一貫性の高い談話展開を行っており、単調な印象を与えていた。一方、英語母語話者は、代名詞と名詞が相補的な関係にあることを踏まえ、あたえられた状況に対して適切にこれらの表現を使用し、受容者の注意や関心を高めることに成功していた。

以上の照応表現習得における調査結果より、語彙や文レベルだけでなく、談話レベルにも中間言語が存在することが実証的に示された。

第六章は、まとめと課題である。照応表現の研究は、統語レベル、意味レベル、語用論レベル、談話レベルと多岐にわたっている。又、心理言語学的アプローチによるコンピュータを用いたオンラインでの習得研究や、大規模コーパスを用いて数量的に分析を行なう研究なども多い。これらの様々な知見を取入れ、理解と産出について更に研究を進めていく必要があると考えられる。

論文審査の結果の要旨

(論文の概要)

本論文は、日本人英語学習者の談話における照応表現習得過程の横断的観点からの実証的な研究である。語彙や文レベルを越えた談話にあらわれる照応に焦点を決め、英語母語話者と日本人英語学習者からえたデータを統計的に処理し、学習者のグレード別の特徴や、学習者と英語母語話者の照応の処理についての類似点・相違点を明らかにし、その説明を試みている。データは、理解と産出の両面について、被調査者から収集した第一次資料からなっている。

まず第一章では、「談話」と「照応」について、先行研究の詳細な検討と評価が行われ、談話が、テキストとの対比によって、定義され、照応表現の遺漏のない解釈には談話レベルでの考察が必要であるとの指摘が行われている。

つぎに第二章では、照応表現との関連において、中間言語研究と第二言語習得研究についての先行研究が検討されている。言語習得過程は、学習者が入手可能な言語データに基づいて目標言語の言語システムの仮説を立て、修正したり、廃棄したりしながら目標言語に近づいていく過程であり、これを中間言語と規定し、中間言語の特徴を実証的に研究するという立場を明らかにしている。

第三章では、研究の枠組みをなす調査項目を設定する。「理解」の調査に関しては、Halliday & Hasan の結束性の研究における枠組みを基本的には踏襲するが、外界照応などを導入することにより先行研究の不十分な点を改善しようとしている。また、「産出」に関しては、中心化理論を援用するが、その欠点を除くために、独自の分析法を追加しデータの分析をすると同時に、中心化理論の説明力を高めることを試みている。

第四章では、「理解」の観点から、指示、代用、省略についての膨大なデータの分析が行われている。日本人学習者は、初級、中級、上級に区分され、そのデータと英語母語話者のそれとが、統計的処理を踏まえて厳密に比較され、説明が行われている。

第五章では、「産出」の観点から、さらに、書き言葉（論文中では「作文」）と話し言葉（論文中では「発話」）に区分けし、データの分析が行われている。分析に使用された中心化理論は、同氏により改善され、談話分析に、より適したものとなっている。グレード別の、また、英語母語話者の一貫性の構築法の違いが、照応関係の視点から詳細に説明されている。

最後に、今後の課題への言及がある。

(評価)

この種の研究では、Halliday & Hasan が代表的な先行研究であるが、同氏はこの文献を詳細に、批判的に検討するところから始め、関連する多数の文献を広く参照し、種々の観点からの照応についての研究を要領よくまとめ、あわせて、照応についての先行調査を網羅的に一覧表にするなどして、先行研究の成果を確認し、それをさらに高めるべく、独自の視点から照応習得過程についての実証的研究を行っている。本論文は、本文 201 ページ、付録、資料あわせて 40 ページにおよぶ労作である。

まず、従来の語彙や文法のレベルでの照応研究は、その限りにおいては一定の成果をあ

げているとはいえ、現実の発話では談話を配慮した研究が必要であるとし、また、潜在的先行詞に代表されるように、表面的に明示的な言語現象だけでは説明しにくい現象があるという指摘は説得力がある。同氏によれば、談話の意味は、テキストからの刺激と外界や言語に関する知識との相互作用によって能動的に作り出されるものである。テキストとの対比により、談話の説明が明確に提示されている。

照応については、文法的なものでは答えが一元的に決まる場合が多いが、談話においては、日本人学習者ばかりではなく英語母語話者にも、解釈に「ゆれ」が生じる、つまり、答えにばらつきが生じるという指摘がされており、このデータについての数量的処理に基づいた指摘は貴重である。また、日本人学習者の「ゆれ」と英語母語話者のそれとの比較は、新鮮な視点であると評価できる。ただ、「ゆれ」の原因には種々の要因が含まれており、その原因の特定のためにはさらに詳細で、慎重な分析が必要とされる。

「理解」に関する調査は、指示、代用、省略のデータについて行われ、「ゆれ」の生じないもの、生じるものに区分けし説明が行われている。特に、英語母語話者のデータにおける「ゆれ」は、言語の使用が、単純に正用、誤用に分かれるものではないことを統計的処理を通じて確認しており、英語教授の現場へ示唆するところも大きい。また、照応習得過程が、初級、中級、上級と順を追って必ずしも累積的に向上するとは限らないということが数的に示されたことも重要な成果のひとつであるといえる。説明の過程で取り入れられているフォローアップインタビューは適切な配慮であるが、さらに、その面を強化し、単なる推測だけで終わることがないように注意が必要である。

「産出」に関しては、中心化理論を援用しているが、その際、次の修正を加えている。(1) 照応解析に「並列構造」を取り入れることにより、先行詞と照応詞を含む二文が隣接していなくとも扱えるようにする。(2) これまで扱えなかった間接照応を扱う。(3) ゼロ代名詞を扱う。(3)については、最近の中心化理論では考慮の対象になってきているので、まったく新しい提案とはいえないが、適切な指摘であると評価できる。(2)、(1)は、新しい提案である。ただし、(1)の「並列構造」は、たまたま取り上げた「桃太郎」の例に基づいた提案であり、どのような言語資料にも適用できるような一般化が求められる。しかし、これらの修正を加えることにより、照応に関するデータの分析がより適切に行うことができるようになり、同時に、中心化理論の説明力を高めるということにも貢献している。

「産出」に関しては、「桃太郎」、「漫画」、「レシピ」、「自由」(＝自由作文)という課題を被調査者に与えているが、多様なデータの収集を意図した4つの区分は適切であり、同氏の創意工夫が感じられる。書き言葉と話し言葉のデータを集めて分析をしているが、これだけ多様なデータの収集、また、書き言葉と話し言葉の両方についてのデータの収集は、それ自体評価に値する。さらに、話し言葉の音声からの転写は、同氏の苦勞がしのばれるところである。

「産出」に関するデータのなかで、上級の日本人英語学習者が英語母語話者よりも、中心化理論の基準で、より一貫性の高い文を作成するという事実は、さらに確認のための調査が必要ではあるが、興味ある発見であったといえる。

データの統計的な処理は、実証的研究にとって不可欠の部分であり、同氏の精力的な仕事は十分評価に値するが、さらに専門的な知見を踏まえた処理法の習熟が期待される。

論文のなかに、表現が不十分なところ、誤字などの指摘もあったが、全体の文字数を考慮すれば許容範囲内にあるといえる。とはいえ、同氏の今後の慎重な対応が求められると

ころである。

最後に、本論文はデータを収集し、それを分析し、そこに規則性、パターンを発見するという典型的に帰納的、実証的な方法論に基づいているので、理論的な考察は手薄になっている部分も認められるが、この研究を基礎として、理論的な考察を深めることや、理論的な枠組みを構築することが、今後の課題としてあげられる。

本論文は、同氏の 5 年間にわたる真摯な努力の結晶といえる。全体を総括して、本論文が、博士（言語文化学）の学位にふさわしいものであるということに審査委員全員の意見が一致した。